

ゲーテのなかの日本、日本のなかのゲーテ

マンフレート・オステン
山崎達也 訳

I

数年ぶりに日本でゲーテについて講演できることをたいへん嬉しく思います。ゲーテにとって、日本は第二のふるさとだったのでないか、と考えられることがさまざまあり、その内容をお話ししたいと思います。

一九三二年、ゲーテ没後百周年を記念して、日本ゲーテ協会により記念論文集が出版されています。その論文集にはほとんど知られていませんが、たいへん重要なトーマス・マンの論文が掲載されています。そのなかには次のような文章が見られます。

「神話を造り出す個性の奇跡としてのゲーテという人物はいつの日かナザレのイエスと同じくらい崇められるようになるであろう。愛と未来の豊かさという点から言えば、ゲーテという人物はイエスと似ていないとは言えないし、ゲーテは生きているときからすでに神に似た人間と言われていたのだから」

この論集が出版されてから十七年後の東京に大きなゲーテ博物館が落成されるとは、このときトーマス・マンはもちろん知る由もありませんでした。その博物館は私たちに「ゲーテは実際、その精神からすれば、ドイツ人ではなく日本人ではなかったのか」という問いを抱

かせます。これこそが、ゲーテの崇拜者であった粉川忠が一九四九年に私財を投じて東京の北区に建設したゲーテ記念館なのです。そこには粉川自身が収集した蔵書が備えられ、その数は二十二万点以上に及び、文献カードは百五十万を超えています。これは十九世紀からつづく日本におけるゲーテ・ブームの集大成でもあります。以下において、このブームにおける熱中ぶりの内容を明らかにしていくなかで、次のような問いが浮かび上がってくるでしょう。すなわちゲーテ自身も日本へ熱中していたのではないかということです。その答えは、一八一三年、当時若きオーストリアの将校で後に陸軍元帥となったヘス(Heinrich von Hess, 1786-1870)が、ゲーテをドレスデンの日本展示館の王室コレクションに案内した際の報告書に見ることができます。「私たちの今回の散策は日本展示館のみに限られた。(中略)めったに見ることができない芸術作品、とくに日本の作品の嗜好形成、その形式や画法に関するゲーテの所見とそれらを見比べる能力は非常に独創的であり、信頼に値するものであった。ゲーテは、その芸術がも

っている独自性を日本人特有の生活習慣や歴史の成り行きから解きほぐし明るみに出したのであった」

ゲーテは日本人「特有の生活習慣」に精通していたのでしょうか。また、日本人の芸術を同質なものとして意識していたのでしょうか。少なくとも日本において意識されたゲーテとの同質性がいかなるものであったかについては、粉川資料館にある日本の初期のゲーテ翻訳や出版物から読み取ることができます。

ところでニーチエ(Friedrich Nietzsche 1844-1900)が、ゲーテは「ドイツ人の歴史のなかで後に痕跡を残さない異例の出来事」⁽¹⁾と簡潔に述べましたが、ちょうどその時期に、日出ずる国ではゲーテ受容が始まったのです。そしてその受容は、ゲーテはいまだにいかなる影響も与えていないし、ゲーテの時代はまずもって到来しないであろうというニーチエの言葉が少なくとも日本においては真実ではなかったことを物語っています。日本にゲーテの時代が到来したのは一八七〇年代の明治時代であり、それは普仏戦争に勝利しドイツが注目を集めるようになった時期です。

普仏戦争直後のいわゆる「泡沫会社乱立時代」(Gründerzeit)にゲーテを崇拜した最も著名な日本人といえ、一八八〇年代のドイツで医学を研究した優れた詩人森鷗外にはかなりません。鷗外は帰国後、ゲーテの数多くの詩やエッセイの卓越した翻訳、『ファウスト』の全訳を完成することで、例のゲーテ・ブームの幕開けを告げることになったのです。これに引きつづき、一九二〇年代と三〇年代には、三つの日本語によるゲーテ全集(これには三十巻を超える改造社版も含まれる)が同時出版されることになりました。その間にも個々の翻訳された作品(最高記録はゲーテの『若きウェルテルの悩み』で四十を超える翻訳がある)の出版、数多くの単行本、ゲーテ研究に関連するほとんど数え切れないほどの文献も世に出たとは言うまでもありません。

そのうえ、日本のゲーテ・ブームは特定の人たちに限定された文学研究会やドイツ文学者の特権に限られたものではありませんでした。実際のところ、英訳を通じてではありませんが、ゲーテが最初に知られるようになったのはプロテスタントのグループであり、そして

ゲーテを原文で読み始めたのは日本の哲学者たちだったのです。二〇年代に大村書店版全集九十巻が出版されると、ゲーテは日本の研究のなかですでに自然科学者としての地位も確固たるものにしていました。

ついでに言うと、日本には二つのゲーテ協会があり、それぞれ独自の年報を発刊しています。しかもゲーテ没後百年目に当たる一九三二年には、二冊のりっぱな記念論集が出版されています。

近代日本にとってのゲーテの意義については、日本の著名なドイツ文学者であり翻訳家でもある手塚富雄氏が、以下のように評しています。

「一八六八年以降、つまり明治時代以降、たしかにゲーテ以外にも日本の思想界に広範に影響を及ぼしたヨーロッパの思想家はいた。しかし、ゲーテは次の三点において他の思想家を凌駕している。つまり彼の日本における影響力は『安定した持続性』に基づくものであり、学者のみならず、『日本民族の幅広い層の人々』を惹きつけてやまない。しかも、日本人に対しての影響力は、詩作を通してというよりは、彼の『人生の叡智』

に負うものが多い」

以上述べたように日本人はゲーテを受容していったのですが、そのほかの例としてあげられるのが、ゲーテ愛好家であった三井光弥の著作『父親としてのゲーテ』です。さらには、門前町の日光市のかつての市長が八十三歳になったときに書いた詩をあげることができません。

三月二十二日、ゲーテ

八十三歳にて没す

我、三月二十二日の今日

八十三歳となる

日本人の思考とゲーテの思考との間にある、ひそかに知られるようになった精神的な「親和力」(Wahlverwandtschaft) について日本のゲーテ専門家に尋ねてみると、連関することながら非常に多岐にわたっていることに驚かされます。しかしそれらの共通項をあげるとすれば次のようになります。すなわち日本人の

精神性もっている要望にゲーテが十分に答えているということですが。具体的には、ゲーテの客観的であった抽象的理論を避ける思考、汎神論的世界への畏敬、率直さと寛容の精神などがあげられます。そしてこのことに関して注目されるべきことは、不可能と考えることをも統合してきた日本特有の実用的なシンクレティズム、折衷主義です。その統合とはつまり、日本本来の自然宗教である神道と外来の宗教(仏教・儒教・キリスト教)との統合、ついには西洋の文明と技術との統合にいたるわけです。

だとすれば、日本人は生まれつきの折衷主義者なのでしょうか。そしてゲーテは日本人のシンクレティズムのスーパースターなのでしょう。つまりゲーテは、よく非難される日本人の例の能力、すなわち他人の真似をしてそれを我が物とする能力の保証人ということになるのでしょうか。ゲーテのことを熟知している日本人がその答えとしてあげるのが、ゲーテがヴィルヘルム・フォン・フンボルトに宛てた手紙のなかの一節です。

「最高の天才とは、いっさいを受容し、いっさいを自分のものとしながら、自己の本来の使命、すなわち性格と言われるものをいささかもきずつけず、それどころか、いよいよそれを高揚させ、できる限りその能力を發揮させるものことです」⁽³⁾

先ほどゲーテと日本との精神的「親和力」に言及しましたが、その例としてここでさらに、ゲーテの礼節さ、そしてすべてのものを認め、すべてのものに対する畏敬と感謝の念をもつという天賦の才をあげることができまます。これは儒教から影響を受けた日本人の社会感情とまったく同質と思われる美徳なのです。そして、現在すなわち瞬間の永遠性を尊重するゲーテの価値観が日本人の人生観に一致していることが強調されるでしょう。さらには、日本の俳句や短歌といった抒情詩の形式における特徴がゲーテの機会詩のなかに見出されることもあげられるでしょう。

ところで、ゲーテが岩石の研究に携わり、岩石を「無言の教師」と名づけたことは石庭の国では自ずと理解されることでしょう。同様に、カミカゼとサムライの国

でゲーテの『若きウェルテルの悩み』に特別な共感を抱くことも誰もが納得することでしょう。美術史家で哲学者である亀井勝一郎は、ゲーテのこの書簡体小説のなかに死の美学を見出し、桜の花散るなか、人間の苦悩を清覽するという純潔なる理論に自己を献げるといふ伝統的な日本の考えかたになぞらえています。しかも日本の神道の清めの儀式からみれば、『ファウスト』第二部の冒頭「優雅な土地」において、ファウストが忘却と赦しの呪縛のなかで快癒していくことは、いわば自然の成り行きだと言えるでしょう。

ゲーテがこのように日本に生きつづけていることについて、ドイツ文学者木村直司氏はデュッセルドルフのゲーテ博物館での講演のなかで心和ませる言葉でこう語っています。

「日本人はこのドイツの思想の父に対して、常に感謝の念を抱き続けることをお約束致します」

II

このドイツ精神の代弁者に対して、創価学会インタ

ナショナルの創設者・会長である池田大作氏は青年の頃から特別に深いつながりを感じ、感謝の念を抱いています。二〇〇九年十二月、ワイマール・ゲート協会からシヤドウ (Johann Gottfried Schadow, 1764-1850)⁴ が製作したゲート・メダルを授与された際、池田会長は衷心からの感謝の念を表明し、自らの生き方や考え方がゲートの精神を基盤としていること、日蓮仏法にめぐりあう以前は、ゲートが精神的糧であったと語っています。また、彼の夫人がはじめて彼の部屋を訪れたときにゲートの書籍で埋め尽くされている本棚を見て、たいへん驚いていたという思い出を紹介しています。さらには、ゲートが偉大な詩人であり、ゲートという名が未来永劫に残るであろうと語っていました。

ワイマール・ゲート協会の会長であるヨッヘン・ゴルト博士は、池田会長とゲートとのこのような絆について、ゲート・メダル授与に関する祝辞のなかで次のように述べています。

「池田SGI会長は、人間主義の精神において他者の幸福の実現をめざし、また人間自身の向上によってよ

りよき世界を実現することをめざして、たゆむことなく行動してこられました。それは、ゲートの中心的思想を実行に移すものであったといえましょう。

SGI会長が、生涯をかけてゲートに深く心を寄せてこられたことは、自伝のなかに色濃く表れています。また、多くのご著作や、とりわけ高校生や大学生に向けて行われたゲートに関する講演において、SGI会長は、人格形成に関するゲートの思想をゲートの生涯や作品から具体例を出しながら、描写されています。

さらに、ゲートの精神に根ざす池田SGI会長の行動は、日本を越えて展開されており、その一例としてあげられるのが、ライン川沿いの町ビンゲン市に設立されたドイツSGIの文化会館、優雅な『ヴィラ・ザクセン』にあります。といえます。この建物は、かつてゲートがビンゲン市近くのロフスの祭りを訪れたことを記念したものです。このことから、『ヴィラ・ザクセン』では、一九九九年にゲート生誕二五〇周年を祝う祭典が執り行われ、その後も幾度となくゲートについて講演会が催されているのです」

ところでゲーテと池田会長との絆を考えてみると、日本におけるゲーテ受容の特徴すなわちゲーテ思想と仏教との連関ということが想起されます。というのも、先ほど述べた東京ゲーテ記念館の設立者である粉川氏の恩師も信仰心厚い仏教徒であり、ゲーテを観音という仏教思想と結び付けて考えていたからです。彼にとって、『ファウスト』の終わりに示されているゲーテの救済思想は仏の慈悲と完全に一致するものでした。同様に、ゲーテ研究者である星野慎一氏は、ゲーテの思考とももの感じ方は禅仏教や他の大乘仏教の中心となるものの見方と同じ特徴があることを明示しています。

ゲーテが生命の永遠性に対する仏教的信念に近づこうとしていることも注目されるべきでしょう。この点に関してゲーテ自身は次のように述べています。

「私にとっては、われわれの靈魂不滅の信念は、活動という概念から生れてくるのだ。なぜなら、私が人生の終焉まで休むことなく活動して、私の精神が現在の生存の形式ではもはやもちこたえられないときには、

自然はかならず私に別の生存の形式を与えてくれる筈だからね」⁽⁵⁾

また、『ファウスト』のなかに、間断なくなかに駆りたてられてこの世の苦しみを増大させていく者の話が見られることも興味深いことです。したがってこの悲劇は明らかに、仏教の知恵が説く十界とは逆の道を歩むことになります。つまり、『ファウスト』においては畜生界から菩薩界へと上昇の道を歩むのではなく、「天国から、この世を通じて地獄へまでも歴回つてもらいましょうか」という宿命的な道を歩むことになるのです。

ファウストはまた仏教的な意味で悪い「業」(Karma)をもっている者として描かれます。つまりファウストはかつて大量殺戮者だったということです。「復活祭の散歩」とのときにファウストは書生のワーグナーに錬金術師であった父とともに体験したことを次のように語っています。

「父と己とは、その悪魔めく煉り薬で、この界限の谷々、山々に住む人たちの間に、ペストよりも怖ろし

い害毒を流して歩いたのだ。己は手ずから幾千という人にこの毒薬を与えて、患者は次つぎと死んで行ったのに、その己が、この不屈きな人殺しが、現在こうして褒めそやされているとは」

つまりは、ファウストは現在群衆から崇められているが、群衆は自分たちの先祖がファウストに毒を盛られて殺されたことを知らないというわけだ。

しかし仏教的な意味で理解される世界とはまったく対極にある世界も『ファウスト』のなかには描かれています。その世界は悲劇の結末になって現れてきます。そこで死んだファウストとその陽の当たらない人生について実にきっぱりと語る者、それがメフィストフェレスです。

「一体、永遠の創造になんの意味があるというのだ。創られた物は、かっ攫って『無』の中へ追い込むだけのことだ。『過ぎ去った』、それはどういう意味だ。元からなかったのと同じことじゃないか。それなのに、何が在るかのようには、どうどうめぐりをしているのだ。それよりおれとしては『永遠の虚無』の方が結構だね」

このことはブツダがバラモン教の異端者であったことを考えると興味深い話となります。というのは、ブツダはバラモン教の二つの原理すなわちブラフマンとアートマンを受け入れずに、その代わりにニルヴァーナの思想を説いたからです。こうした背景からみると、『おれとしては『永遠の虚無』の方が結構だね』というメフィストの言葉は、ニルヴァーナの思想への非常に独特な接近であるように思えます。メフィストは悲劇のちよūd冒頭でも、自分自身についてなにごとにも束縛されることなく実に自由に語っていますが、それはニルヴァーナというパースペクティヴに照らして語っていると思えるほどです。

「私は常に否定する霊です。それも道理に叶っておりましょう、なぜなら、生まれるということは、消え失せるということなのですからね。だから、何も生まれてこない方がいいわけでしょう」

さらに『ファウスト』のなかで興味深いのは、望楼の見張り人でリユンコイスという名の登場人物です。彼は悟りの境地に達した唯一の人物なのです。リユンコ

イスはこの世の苦しみに関わらないし、ファウストの所業にも手を貸すことはありません。リユンコイスはつまり、かつてゲーテが「行動者はつねに無良心である。観察者以外のだれも良心をもたない」といった意味で世界を観察し悟りに達した者なのです。したがってリユンコイスすなわち「観察者」は「おれは森羅万象の中に永遠の飾りを見る」と語ること、創造的精神をもった平和の使者となるのです。

じつはゲーテには、『ファウスト』にかぎらず、仏教と類似している思想が繰り返し見られます。ゲーテはたとえば、まだ若い頃に親交のあったシユタイン夫人に次のように語っています。

「おお、あなたは前世において私の姉か妻でもあったのだろうか」⁽¹²⁾

この一節は、ゲーテが輪廻思想も知っていたことを意味すると思われまます。

また、生命の永遠性については、ゲーテは「行為」ということを重視しています。「行為する」ということは、「他者のために生きる」ということです。ゲーテは「生き

るということは、幸福になることである」といいますが、「他者に貢献する」「他者の幸福のために生きる」ことによって、自身の生命を永遠ならしめる、と言いたかったものと思われまます。そのことは、「瞬間こそが永遠である」とするゲーテの思想とも関連づけられます。今のこの瞬間を懸命に生きることによって、そして瞬間を無駄にせず全力を投入することによって、永遠性に自分では参画できると信じていたようです。

ゲーテの最後の言葉といわれている「もつと光を」については、さまざまな解釈がありますが、「もつと啓発を」との意味があつたと考えています。「啓発」ということもまた、今の瞬間を、精一杯生きることによって永遠性に参画するという意味があつたのではないでしようか。

私は六年間、外交官として日本に居住しましたが、そこで感じたことは、日本語の表現というものは、短歌においても俳句においても、「今」を最も強調する点だということです。ゲーテも「今」を重視する詩を数多く残しています。こうした点が、日本文化とゲ

ーテとの最も興味深い共通項ではないかと思われれます。最後に次のことを問うてみたいと思います。

ゲーテのなかで日本的思考と関連すると思われる、繰り返し蘇ってくるということは可能なのでしょうか。ゲーテが日本的思考に取り組み契機となったのはドイツ人医師エンゲルベルト・ケンプファーの日本に関する紀行文でした。ケンプファーは十七世紀に、旅行記を書くために、見聞したことを収集する目的で無許可で日本上陸に成功した人物です。ゲーテはこの旅行記を読んでいました。だから彼は一八一三年ドレスデンの「日本展示館」で例のオーストリア人将校に日本の解説を行うことができたのです。

ところでこの解説には二重の意義があります。一つは、ゲーテが日本だけが有している個性という観点から日本を認識していたということ。もう一つは、ゲーテが同時に日本という国の枠を超えた文化的つながりのなかで日本を見ていたということです。

一九九四年に日本の天皇がドイツを訪問された際、ワイマールのアンナ・アマリア図書館に立ち寄られま

した。そのときゲーテのものを閲覧したいという天皇の要望に応えて、ゲーテが所有していた、しかもゲーテ自身の書き込みのあるケンプファーの日本紀行文を呈示したこともしたが、つて不思議なことではないでしょう。

この旅行記を通してゲーテは日本の銀杏の木と中央部が浅く二つに割れているイチヨウの葉を知ることになり、自分の庭に銀杏の木を植えています。一八一五年、ゲーテはイチヨウの葉を詩にしていますが、この詩は日本へのゲーテ自身の個人的な遺産として読むことができるでしょう。最後にこの詩の第一節目を引用したいと思います。

東の邦より

わが庭に移されし

この樹の葉こそは

秘めたる意味を味わわしめて

物識るひとを喜ばす⁽¹³⁾

注

四年、一二八頁。

(1) ニーチェ、『漂泊者とその影』、第二二五節。

(2) Tezuka, T., Goethe and the Japanese (*Japan Quarterly*, 11, 4, 1964, pp. 481-485.)

(パンフレット・オステン／ワイマール・ゲーテ協会顧問) (訳・やまざき たつや／東洋哲学研究所研究員)

(3) 『ゲーテ全集一五』、小栗浩／生野幸吉他編・訳、潮出版社、一九八一年、二六四頁。

(4) ドイツの版画家であり、ドイツ古典主義時代の最も著名な彫刻家。

(本稿は、2009年12月10日に行われた特別公開講演会の原稿を翻訳したものです。日本語タイトルは、講演者の了承を得て、訳者が変更しました)

(5) エッカーマン、『ゲーテとの対話(中)』、岩波書店、一九七五年、五四頁。

(6) ゲーテ、『ファウスト』『前狂言』、高橋義孝訳『ファウスト(一)』新潮社、二〇〇六年、二四頁

(7) ゲーテ、『ファウスト』第一部、「市門の前」、前掲書(一)、七七頁。

(8) ゲーテ、『ファウスト』第二部、第五幕、「宮殿の大きな前庭」、高橋義孝訳『ファウスト(二)』、新潮社、二〇〇六年、四五三頁。

(9) 『ファウスト』第一部、「書齋」、前掲書(一)、九五頁。

(10) ゲーテ、『箴言と省察』、岩崎英二郎・関楠生訳、『ゲーテ全集』第三卷、潮出版社、二四二頁。

(11) 『ファウスト』第二部、第五幕、「深夜」、前掲書(二)、四三三頁。

(12) ゲーテ、『くさぐさの歌』、松本道介訳、『ゲーテ全集』第二卷、潮出版社、二七頁。

(13) ゲーテ、『西東詩集』、小牧健夫訳、岩波書店、一九六